

保育総合研究会広報誌 NO. 76

発行所: 保育総合研究会事務局 H31.4.16
茨城県東茨城郡茨城町上飯沼1276-1 飯沼こども園内
TEL029-292-6868 FAX 029-292-3831
発行人: 会長 梶 沢 幸 苗



平成31年2月5日(火)、午後1時から、6日(水)までアルカディア市ヶ谷私学会館において平成30年度年次大会が開催された。

1 目 目

開会 13:00～ 会長あいさつ

[設立20周年記念事業] 13:20～13:50

米国保育事情視察研修説明会 日 程: 11/21(木)～11/27(水)
日通旅行団体営業部 岡村康彦氏 費 用: 1名549,800円(25名以上)を予定
※ 当会助成金有り
訪問先: ニューヨーク・ラスベガス・サンフランシスコ

研修Ⅰ

14:00～15:30

(テーマ)「食育・食事の提供等に関する
チェックリスト100について」
(講師) 東京家政学院大学教授 酒井 治子氏



食育・食事の提供等に関するチェックリストの作成にあたり、食育・食事の提供従事者は食育基本法を理解しているという前提の上で次のようなチェック項目を考えた。

- I. 園の基本姿勢とうについて(24項目)
 - II. 食育の推進(12項目)
 - III. 食事の提供(61項目)
 - IV. その他(3項目)
- となっている。

- ・保育所における食を通じた子どもの健全育成(いわゆる「食育」)に関する取組の推進について
- ・第5章 食育における給食の運営
- ・食育における保育所の食事の位置づけ
- ・保育所での栄養管理と発達段階に応じた食事内容への配慮
- ・食事提供の為実態把握
- ・献立作成 ・調理 ・盛り付け、配膳
- ・食事 ・衛生管理 ・家庭への喫食状況の報告
- ・食事の評価、改善



研修Ⅱ

15:45～17:00

(テーマ)「幼児教育・保育の
無償化について」
(講師) 当会副会長 坂崎 隆浩氏



幼児教育・高等教育無償化の制度の具体化に向けた方針

1. 総論
「新しい経済政策パッケージ」及び「経済財政運営と改革の基本方針2018」を踏まえ、具体的な制度設計を行うとともに、法則化に向けた検討を進める。
2. 対象者・対象範囲等
 - ・幼稚園・保育所・認定こども園等は無償化の対象
 - ・幼稚園の預り保育
 - 上限月額11,300円までの利用料を無償化
3. 認可外保育施設等
認可外保育所における保育料の全国平均額までの利用料を無償化

幼児教育の無償化に伴う取り組み

地方自治体によっては既に独自の取り組みにより無償化や負担軽減を行っている。今般の無償化がこうした自治体独自の取り組みと相まって子育ての支援の充実につながるようにすることが求められる。このため、今後の無償化により自治体独自の取り組みの財源を地域における子育て支援の更なる充実や軽減等に活用することが重要である。



2日目 研修Ⅲ

9:30~11:30



(テーマ)「今後の保育の質をどう考えるべきか」
(講師) 玉川大学教育学部教授 大豆生田 啓友氏

1. 教育・保育を取り巻く大きな変化

・乳幼児期の教育・保育が注目され社会の話題になる時代である。
しかし教育・保育が重要であるという観点でなく待機児・保育士不足・事故等の問題に焦点があてられる。さらに、日本の無償化は先進国の無償化と違って長時間保育を誘導していく形である。保護者に、本来の保育の重要性が理解されていない。研究で分かっているエビデンスの逆発想で3歳までの訓練で発達が決まるという発想から色々なことを させる要望がでる。

・子ども子育て新制度は、良い悪い両方の側面はある。医療・介護・年金・子ども子育てと、初めて子ども子育てが社会保障制度に明記される。社会全体で乳幼児期の教育・保育の質が重要であると考え費用を投入する。

・3法令の改訂は、保育所・幼稚園・こども園に同じ教育があると制度化され、今までと違い学校教育のスタートが乳幼児期にあるとも考えられた。

・文科省・厚労省が保育の質の検討会議がスタートされ注目されている。検討内容は、沢山の課題から現状を考慮に入れ優先順位をつけて行う。

・日本の教育の改訂は、これまでと違い世界的規模でAI 社会等の難題をどう乗り越えていくか問題である。暗記して答える学力でなく問題解決学習型でアクティブラーニングの教育に改訂する。

2. 保育所等における保育の質の確保・向上に関する検討会(中間報告)

・子どもが主体的であることは大前提である。

・自己評価のガイドラインの見直しについては、自己評価がベースであり毎日の保育の振り返りが質向上の基盤になる。振り返りの記録として世界的にはポートフォリオやドキュメンテーションであるが日本は監査がある為今は認められていない。短時間で日々の保育の振り返りと、ある程度のスパーンでチェックリストを活用して自己評価にする。

・理念の明確化については、園内での保育の語り合いを確保することが重要である。

・外部及び園内研修については、研修を受けることが質の向上に繋がるのではなく、適切な研修が重要である。

・リーダーシップについては、園長の役割が保育の質の向上についてきわめて重要であるとエビ

デンスにある。しかしトップダウンだけでなくミドルリーダーを初めとする分散化のリーダーシップ体制を作ることが重要である。

・幼保小の連携と地域との連携については、これまで様々な歴史があるため全体で取り組める かが問題である。自治体が、町おこしのようにどう動かし乗り越えていくかががぎになる。

・保育実践内容の見える化については、見えないため重要な教育だと理解されていない。10の姿は人に説明するツールで「なるほどそういうことが育っているのか」という手段である。

・保育の質の向上における役割に行政を巻き込みながら自治体を動かす。大事なことを社会全体で分かってもらう。

3. 質の定義は世界的にもない。

思考性の質②構造の質(面積・職員と子どもの比率)③教育の概念(指針)
④プロセスの質(環境や保育士の関わり等の毎日の保育)⑤研修・評価⑥子どもをみる視点と一言で言えない。質の高い園とは、もっと00したらいいよねと質を高めようと動いている園が質の高い園ととらえる。

4. 世界に比べて日本の保育の良さ

日本の保育は子どもの心もちを大事にする。園庭の環境に力を注ぎ、外遊びやお散歩の文化があり子どもを見守り抱きしめる文化がある。だから世界の基準で世界から学ぶだけでなく自身の保育ももっと評価されるべきである。

5. 乳幼児を育てる大切な2つの視点(情動的スキル)

大人から、「かわいいかわいい」と肯定的に受容的に応答的にかかわられたこどもは発達がよい。遊ばせているだけ、一斉にさせているだけではなく夢中になれない。夢中になるしかけがあること。夢中になり遊びこむことで、やりとげる力や粘り強さコミュニケーション力や自分自身に折り合いをつけていく自己制御が育っていく。

6. 環境のコーナーの作り方については、遊びのブームが起こることが重要である。そのために遊びを選べること興味のある遊びが発展できる環境を作る。あそび後の、集まりの時間を共有する大切な時間にする。これらの工夫がブームになるかならないかの差である。

